

NANSO SATOMI
HAKKENDEN

南総里見八犬伝

Written by KYOKUTEI BAKIN

原作：曲亭馬琴



Sample



©awabunka

【原作者紹介】

原作者の「きよくていばきん曲亭馬琴」は、
本名を「たきざわおきくに滝沢興邦（のちに解と改名）」といい、
一七六七年に、江戸の深川ふかがわで生まれました。

現在、一般的に「滝沢馬琴」という名前で親しまれていますが、
これは後生こうせいになって広まった呼び方です。

執筆当時は、「曲亭馬琴」というペンネームを使っていました。

馬琴は八二年の生涯の中で、
二〇〇以上の物語を創作しています。

なかでも、『なんそうさとみはつけん南総里見八犬伝』は、
一〇六冊からなる大長編小説であり、
完成までに、二八年もの年月が費やされました。

『八犬伝』には、四〇〇人以上もの登場人物が存在し、
お話の舞台も、関東地方を中心に、京都にまで及びます。

そして、この物語の最初と最後の舞台となるのが、
この南房総、安房の地です。

安房の地は、戦国時代から一七〇年にもわたって、
ぼうそうさとみし房総里見氏が支配していた地域であり、
馬琴は、この里見氏の歴史を題材にして
『八犬伝』を創作しました。

馬琴は、一度も安房の地を
訪れたことがなかったのですが、
地誌や歴史書を参考にしながら、
想像力を駆使して、物語の世界を創り上げたのです。

それでは、『南総里見八犬伝』の
はじまり、はじまり。



【第一話】

昔むかし、安房の国に、里見のお殿様と、娘の伏姫がおりました。

伏姫は、たいそう美しいお姫様で、水晶の数珠を、いつも首にかけていました。

姫には、仲のよい犬のお供がいて、名前を八房とよみました。

ある日のこと、安房の国に、悪者が攻めてきました。困ったお殿様は、八房にこう言いました。

「悪者をやっつけたら、

伏姫をおまえの嫁にしてやろう」

すると八房は、悪者のところへ駆けて行って、たちまちのうちに退治してきました。

お殿様は、大切な娘を、

犬の嫁にするのが嫌になり、

戻ってきた八房を、槍で追い払おうとしました。

八房は怒って、大きなうなり声をあげて暴れました。

それを見ていた伏姫は、

「お父様、お別れするのは悲しいですが、約束は、守らなければなりません」

と言って、八房の背に乗って、どこかへ行ってしまうました。



【第二話】

里見のお殿様は、娘を取り戻すために、国中を探し回りました。

ある日のこと、ついに家来の金碗大輔が、
富山のほら穴に隠れ住んでいた、伏姫と八房を見つけました。

「犬のくせに、姫と結婚するなんて！」

大輔は怒って、姫の傍にいた八房を、
鉄砲で撃ち殺してしまいました。

しかし、なんとしたことか！

鉄砲の弾は、伏姫にも当たってしまったのです。

その時、偶然、お殿様も、ほら穴の近くまで来ていました。

「ああ！ようやく娘に会えたというのに！」

二人が嘆き悲しんでいると、突然、
伏姫の体から、白い煙が立ちのぼり、
水晶の数珠を、包み込みました。

そして数珠のなかの、大きな八つの珠が、
空高く舞い上がり、輝きながら、
どこかに飛び散っていつてしまいました。

この八つの珠には、
「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」
という文字が、刻まれていました。

大輔は、姫を死なせてしまったことを後悔して、
お坊さんになりました。

名前も、大法師と改めて、飛び散った八つの珠を探す、
長い旅に出かけて行きました。



【第三話】

大法師が旅に出てから、十五年もの月日がたっていました。

武蔵の国までやってきた時、

光輝く、不思議な珠を持っている

二人の若者の噂をききました。

チュダイ法師は、さっそく、二人に会いに行きました。

一人は「犬塚信乃」といって、

「孝」という文字のある珠をもっていました。

この字には「お父さん、お母さんを大切にしよう」という意味があります。

もう一人は「犬川莊助」といって、

「義」という珠を持っていました。

この字には「自分のわがままを捨てて、人のためにつくそう」という意味があります。

大法師は、二人の輝く玉を見て、

「伏姫の数珠に間違いない」と思い、信乃と莊助に、大切な話をしました。

「私は、文字の刻まれた八つの珠を探しています。

この珠をもっている八人は、

固い絆で結ばれた仲間なのです。」

この話をきいて、信乃と莊助は、お互いが困った時には、助け合おうと約束しました。



【第四話】

信乃も、仲間を探す旅に出かけるのですが、その前に、足利のお殿様のお城まで行かなければなりませんでした。

お殿様から預かっていた宝物があったからです。

信乃は、何日もかけて、大きな川のほとりのお城に辿りつきました。

信乃がお殿様に会い、宝物を手渡した時です。なんと、それが偽物だとわかりました。

信乃の知らないところで、ある悪者にすり替えられていたのです。

お殿様は、かんかんに怒って、家来たちに

「あの嘘つきを、ひつとらえよ！」と命令しました。

信乃は、追いかけてくる家来たちから、死に物狂いで逃げましたが、とうとう、

お城の屋根の上まで、追い詰められてしまいました。

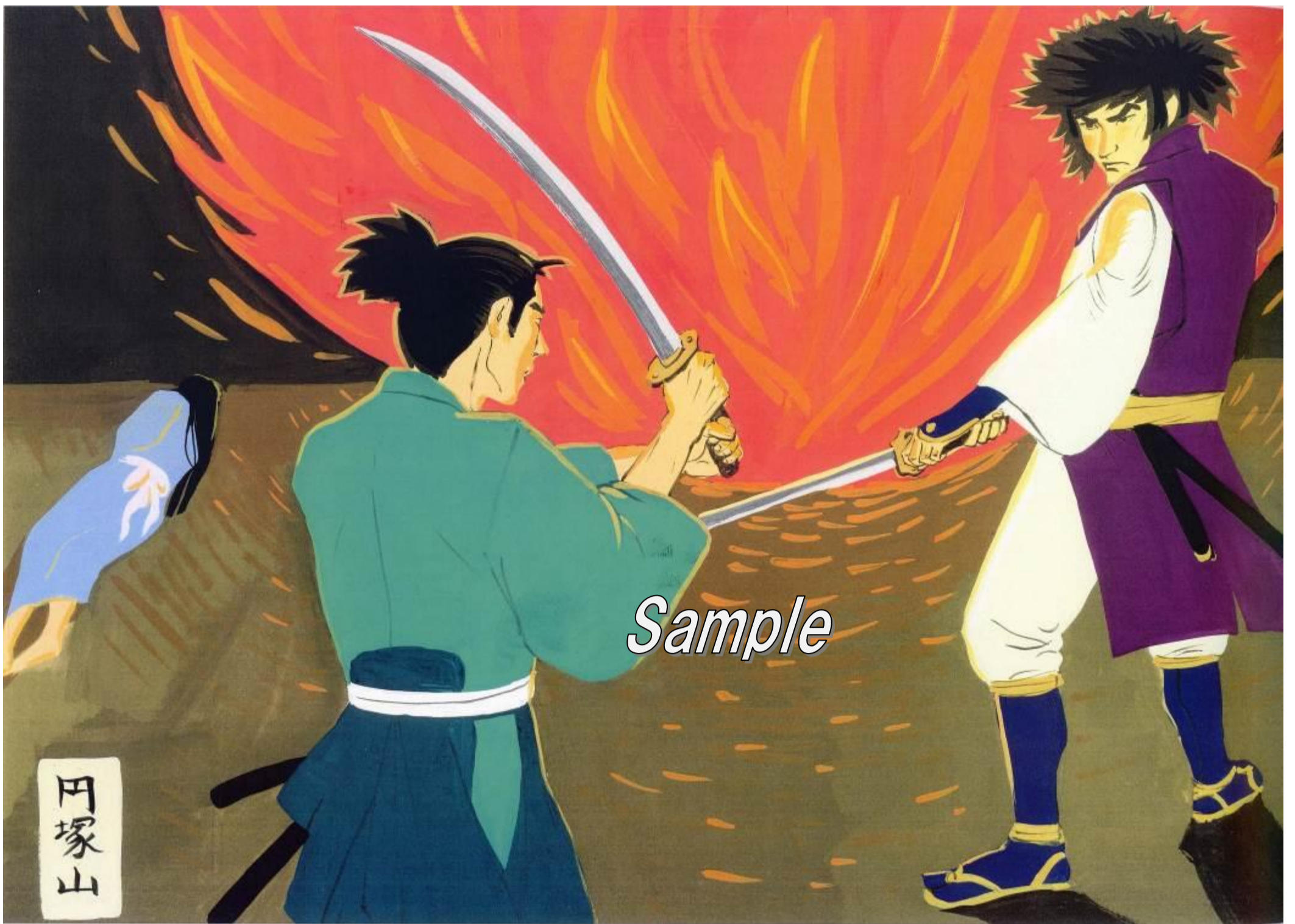
そこに、信乃を捕まえるため、

「犬飼現八」という若者が追いかけてきました。

信乃と現八の二人は、もみ合っているうちに、屋根の上から、真つ逆さまに転げ落ちてしまいました。

二人は、運良く、川に浮かんでいた小舟の上へと、ドンッ！と落ちて、そのまま気を失ってしまいました。

そして、その小舟は、どこかへ流れ去って行きました。



【第五話】

犬川庄助も、仲間を探す旅をしていました。

庄助が、円塚山を歩いていた時、

女の人の悲鳴が、聞こえてきました。

急いで、行ってみると、若い女の人が倒れています。

そして、その傍らには、肩に大きなコブのある怪しげな男がいました。

庄助は、

「なんと、ひどいことをするのだ！ この悪党め！」
と言って、刀で切りかかりました。

男は、突然現れた庄助に驚きました。
実は、女の人を助けるため、悪者を退治したところだったからです。

誤解をとく間もなく、
庄介の刀が、男の肩のコブにあたりました。

すると、そのコブの中から、

あの輝く珠が、飛び出てきたのです。

珠には、「忠」という文字が刻まれていました。

この字には、「真心をこめて人に仕える」という意味があります。

男は、「犬山道節」と名乗りました。

こうしてまた一人、
仲間が見つかりました。



Sample

【第六話】

さて、信乃しのと現八げんぱちをのせた小舟こぶねは、
ゆらりゆらりと川を下って、
行徳村ぎょうとくむらまで、流れつきました。

ちようどその時、川岸かわぎしでは
旅館りょかんの主人ぶんどの文五兵衛ぶんごべえが、釣りをしていました。

そこに、小舟が流れてきたので、
文五兵衛は、息子の犬田小文吾いぬたこぶんごを呼んで、
気を失っていた二人を旅館に運ばせ、
手厚く看護かんごしました。

旅館の親子のおかげで、
元気になった信乃と現八は、
お互いの身の上を話しました。

すると、現八も、あの輝く珠を
持っていることが、わかりました。

現八の珠には、「信しん」の文字が刻きざまれていました。
この文字には「人を信じて、欺あざむかない」
という意味があります。

二人の話を傍そばで聞いていた、小文吾こぶんごも驚きました。

小文吾もまた、「悌てい」と刻まれた
輝く珠を持っていたからです。

この文字には
「兄弟なかよくして、年上のいうことをよく聞こう」
という意味があります。

こうして、輝く珠をもっている仲間が
四人みつかりました。



【第七話】

さて、文五兵衛には、小文吾のほかにも、嫁にいった娘がおりました。

娘には、「真八」という名前の4歳になる息子がいました。

真八は、元気な男の子でしたが、生まれつき、左手を固く握りしめていて、絶対にひらくことが出来ません。

心配した娘は、真八をつれて、徳が高いと評判の、お坊さんのもとを訪ねました。

お坊さんが、真八の左手を、ぎゅっと握ったとたん、手のひらが、突然ひらき、あの輝く玉が転がり落ちてきました。

その珠には、「仁」という文字が刻まれていました。

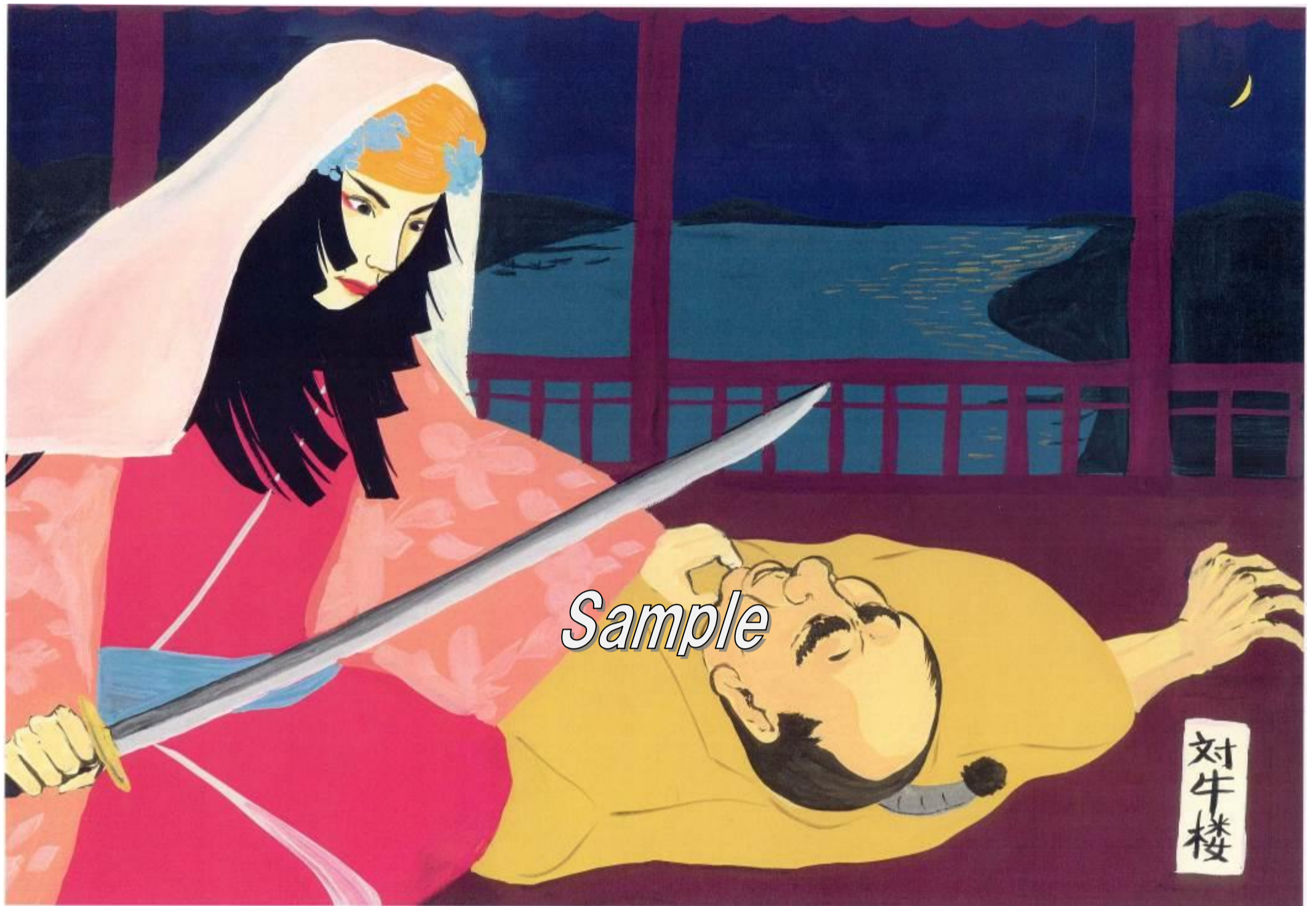
この文字には、「すべてのものに、情け深くしよう」という意味があります。

このことに、娘も真八も、そしてお坊さんも驚き、喜びました。

実はこのお坊さんは、八つの珠を探して旅をしていた、
大法師だったのでした。

その後、真八はすくすくと育って、立派な青年になります。

そして名前を「犬江親兵衛」と改めて、仲間に会うために旅立ちました。



【第八話】

さて、真八しんぱちの叔父おじの小文吾こぶんごも、仲間を探す旅に出かけていました。

その途中で、千葉ちばのお殿様おんさまの家来けらいである「馬加まか」に会いました。

馬加まかは大変欲ほが深く、お殿様おんさまを殺して、国くにをのつとろうと企たくんでいました。

この計画けいけを知ってしまった小文吾こぶんごは、馬加まかの屋敷やしきに閉じこめられてしまいました。

そこに、美しい旅芸人たびげいにんが現れて

たちまちのうちに馬加まかをやっつけ、小文吾こぶんごを助け出しました。

そして小文吾こぶんごに、驚くべき話をしました。

「わたくしは犬塚毛野いぬづかけのと申します。

父親ちちの敵かたきである馬加まかを退治たいぢするため、女旅芸人おんなたびげいにんを装よそおって、機会きかいを伺うかがっていました」

小文吾こぶんごが、仲間なかまを捜さがすために旅たびをしていると話すと、

毛野けのも「智ち」という珠たまを持つ仲間なかまであることがわかりました。

この文字あざなには

「ものごとをよく理解りかいする」という意味いみがあります。

こうして、七人目しちにんめの仲間なかまがみつかりました。



【第九話】

最後の仲間は、下野の国でみつかりました。

犬飼現八が、庚申山のふもとを歩いていると、
一人の男に出会いました。

「私は、十七年も前、この山の化猫に
殺されてしまいました。」

家に残してきた息子の角太郎が、心配でたまらない。」

男は、そう話すと、たちまちのうちに
消えてしまいました。

現八が、角太郎の家を訪ねると

あの幽霊にそっくりな男がいました。

現八は、角太郎が一人になった時を見計らって
庚申山での話をしました。

角太郎は、涙をながして言いました。

「ああ、本当の父さんは、死んでいたのか！
私はどんな目にあっても、父さんを思って

尽くしてきたが、まさか妖怪だったなんて！」

現八と角太郎の二人は、力を合わせて化猫と戦い、
やっとのことで、退治することができました。

現八が、仲間を捜していることを告げると、

角太郎も、「札」の珠を持つ

仲間であることがわかりました。

この文字には、「敬意をもって、きまりに従おう」
という意味があります。

この後、角太郎は、名前を「犬村大角」と改めて、
仲間に会うため、村を後にしました。



【第十話】

こうして、長い年月をかけて、
伏姫の数珠から飛び散った
八つの輝く珠が見つかりました。

そして八人の若者はそろって、
大法師に会いにきました。

大法師は、八人それぞれの苗字にある
「犬」の文字にちなんで、
彼らを「八犬士」と名づけました。

そして八犬士をひきつれて
安房の国の、里見のお殿様の
もとに向かいました。

里見のお殿様は、八犬士を大歓迎しました。

それから、八犬士の活躍によって
安房の国は、平和で豊かな国になりましたとき。
めでたし、めでたし。